

観世宗家蔵へ烏帽子折の謡本について

表 きよし

〈熊坂〉とともに牛若の盗賊退治を扱った能に〈烏帽子折〉がある。この曲は前後のシテが

別人格という特徴を持つ現在能で、幸若舞曲「烏帽子折」とよく似た筋立てを持つなど、未

解明な部分が多い曲でもある。現存する古写謡本もさほど多くないが、最も古い「妙庵玄又手沢五番綴本」(松井閑花氏蔵、慶長頃の写本で曲名は「あつまくたり」)を始め、諸本と

も細部を除けば現行と大きな違いはない。ところが、観世宗家に他とは異なる詞章を持つ謡本が所蔵されている。宗家本は統一九九ミリ・横一三九ミリの仮綴本で、奥書はなく書写年代は明らかではないが、節付などの特徴から江戸前期の写本と推測される。以下に宗家本独自の詞章の箇所を取り上げ、宗家本の特徴を考えたい。段の切り方や小段名は日本古典文学大系「謡曲集 下」によった。

①第2段の「哥」から「上ゲ哥」が宗家本は「下哥栗田口松坂や四の宮川原相坂の上哥閑路の駒も心して〜、と、ろ〜とふみ〜つす」となり、商人の従者となった嘆き、丸

と自分の境涯を引き較べる部分がない。

②第2段末が現行ではワキの「着キゼリフ」だが、宗家本は「問答」で、「ワキ急候程に、鏡の宿に付て候、いかに吉六 吉御前に候ワキ宿はいつもの玉屋へ着候へ 吉長て候、いかに

此屋の内へ安内申候 シカ〜 吉唯今下りて候宿を御かし候へ シカ〜」となる。「問答」の内容から見て宿の亭主(アイの役か)が登場するらしく、宿の名まで示される点が興味深い。松井本にも玉屋の名が見えるが、幸若では宿は「菊屋」とされており、何に拠るのか不明である。

③第4段の牛若が烏帽子屋を訪ねる場面は、現行では子方がシテを呼び出して問答となるが、宗家本は「ハリコ」が牛若を烏帽子屋へ案内する。松井本にも「玉屋のはりこ」が登場するし、江戸期の謡本の多くはアイの登場を示唆する形なので、これが本来の演出であろう。ただし貞享四年(一六八七)奥書の大蔵流の間の本「貞享鞍貫本」は所の者が烏帽子屋を教える形である。

④第5段の「段哥」は、現行では出世の暁には引出物を与えてくれと云う部分、今は平家の世だがいつかは良い時節が巡ってくるという言葉部分、烏帽子がよく似合うと牛若を賞賛する部分から構成されるが、宗家本には真ん中の「あはれ何事も〜咲かん頃を待ち給へ」がなく、短い「段哥」になっている。

⑤烏帽子屋夫婦が刀を牛若に返す場面第8段「ロンギ」は、現行では「シテ東路のお餞と思し召され候へとて地この御腰の物を強ひて参らせ上げ、れば」となるが、宗家本は「二人東路は、〜去所、道すからの御用心とおこしの物を奉る牛荒はつかしやとらしとて、足はやめて出て行 二人こはいかにとて御袖に、すかりつき申つ、しいて参らせ上げれば」という詞章である。

⑥第8段末で牛若は赤坂の宿に着くが、宗家本は「あふはかの宿に付にけり」とする。青墓は赤坂の北方の宿で、〈熊坂〉は長範の夜討を赤坂での出来事とするが、幸若は青墓なので、宗家本は幸若と一致することになる。

⑦第13段でシテがツレに夜討の状況を尋ねる「問答」は、現行では磨針太郎兄弟の討死と高瀬四郎の退却が伝えられるのみですぐに松明の占手の話に移るが、宗家本は高瀬四郎退却の翌吉の後、さらに次の詞章がある。

シヤつは今にはしめぬ大臍病者、中々

足手まといにおらぬこそよけれ、扱越中の  
はやみちは トモもろ手うちおとされて候

シテ上野の国うすいの山賊殿は、トモそれは  
高も、シテうち落されしか トモさむ候 シテ

扱又伊豆のお山の大将、やげじたの小六は

トモそれは一番まつさきの大將、西のひろ  
戸を打落すと同じくほそくび シテ中にて打

おとされしか トモさむ候 シテ三条の右衛門  
みふのこさる、油の小路のこきつねは トモ

それは右に申せしは、返々も今夜の夜討、  
御とまりある様にと申せしか、宵より引て

帰り候

六人の盜賊のうち、三条の右衛門と壬生の小  
猿は〈熊坂〉に見え、やげ下の小六は幸若に登  
場するが、他の三人は不明の人物であり、何  
に基づくのか明らかでない。

⑧第14段の三つ目の〔中ノリ地〕の「三つ頭  
より火を出して」以後が次のようになる。

みつかしらよりくわゑんをいたし、しのき  
をけつりて鐙をはり、秘術をつくしてた、  
かいしか、何とかしたりけん、彼太刀も  
たまらず、ひし〜と打おとされ、ひろゑ  
んを二三間にけて、長刀とつたりけり、扱  
も無念の次第哉、〜、物によく〜たと  
ふれば、山との大天狗、小天狗鬼神か、腹  
立や無念やと、きばをかんてつけばはつし、  
うてはとひのくのすれはのつて、手もとに

よるはむきになる、しきつてはらへは飛あ  
かるを、水車にまはしてかくれば、ちやう  
〜とすきまを切、むねとのおもとは十三  
所、うす手は数をもしらざりけり 上同打物  
わさにてかなふまし：

現行では太刀での勝負の後すぐに力の勝負と  
なるが、宗家本では長刀による勝負が入るこ  
とになり、かなり長大な戦闘場面となる。

以上、現行の詞章との相違点を挙げたが、  
⑤⑦⑧の詞章は天理図書館蔵「番外謡本集」  
〔下村本。『未刊謡曲集』21所収〕にも卷末注  
記の形で記されているので、このような詞章  
を持つ謡本が他にも存在したことは確かであ  
る。宗家本だと、アイとして現行の早打・宿

子の登場するために登場人物が多くなり、後  
場の〔問答〕や戦闘場面も長大でくどい感じ  
である。現行の形を改変したにしては未整理  
であり、むしろ、宗家本の繁雑な演出を整理  
し、①や④のように前場に牛若の嘆きや平家  
全盛の世を表すような抒情的な詞章を加えた  
のが現行の形であると考えの方が妥当に思え  
る。幸若との関係を思わせる部分が見られる  
点も興味深い。最古の謡本である松井本が現  
行の形に近い点は気になるが、宗家本は八鳥  
帽子折の古い形を伝えているのではなから  
うか。

(国士館短期大学講師)